

0

真の応援の力

1

応援。その言葉には二つの意味がある。一つ目は力を添えて助けること。加勢という意味。二つ目は競技などで拍手をし声をかけて、味方やひいきの選手を励ますことだ。多くの人は二つ目の意味で使っていることが多いのではないか。しかし、大切なことは二つ目の意味だなのではないか。

ただ拍手や声だけでなく、相手に寄り添うことが真の応援と呼べるのだと思う。

2

「頑張れ」「できるよ」そんな言葉は何回も聞きたらう。

それらの応援が本当にその人の力になるのか。それは個人差があるかもしれない。しかし、私にとってそれらの言葉は後々の思い出にはならなかった。「頑張れ」と言われて「頑張ってるよ」と思ってしまう年頃のせいかもしれない。

しかしそんな私が真の応援を感じたのが中学2～3年生の時だ。当時私は中学校で区の上位に入るバスケットボール部に所属し、キャプテンを務めていた。

その部は厳しい事で有名で都大会の常連校でもあった。

そんな部活に入り、先輩方と一緒に一年余を過ごし、二年の夏休みに自分の代になり、キャプテンとなったのだ。

そして練習や試合を重ねてその度に怒られる日々が続いた。キャプテンということもあり、人一倍怒られたのではないかと思う。

そのため一時期は部活に行きたくないと思う日々が続いた。

そんな私に寄り添い、励ましてくれたのは母親だった。

落ち込んでいる私の話を聞き、話し合い、考えてくれた。時々喝も入れてくれた。近くで私を支えてくれた母親はとても大きな存在だった。そんな母親が居なかったら私は三年間部活をやり遂げることはできなかつたらう。そう確信している。

母親の他にもう一人、支えてくれた方がいる。それは部活の顧問だ。普段から厳しい人で何回怒られたかわからないくらい怒られた。しかし追い込まれた時は必ずと言っていいほど話を聞いてくれた。そしてよく話もしてくれた。そしてその話や言葉に救われたことも事実だ。3年になり、怒られることも減り、顧問とは仲良くなった。

三年生は夏に最後の大会を終えて引退となる。歴代の先輩方は都大会に出場しベスト32が最高順位だった。

自分達の最後の夏が来た。選手一人一人が多くの方々の“応援”を受けてコートに立った。自分達がしてきたことが間違っていないと信じプレーをした。このメンバーでよかったと誇りを持って戦った。全ての結果が歴代最高の都ベスト16として出たのだらう。

そして何より全員が晴れやかな気持ちで引退を迎えられのがとても嬉しかった。やってきたことが無駄ではないと感じ、真の応援を身をもって感じた瞬間だった。

三年間を通して周りの人から教えてもらったことは私の人生の中の間違いなく糧になると信じている。

そして応援とは何かを体感した今、受けた応援を他の人に贈り、その人の人生の糧となることを成し遂げる助けをしたい、そう思う。

3

応援がその人にとって力になることは難しいことだが、その人の一生の力になることがある。

私もそのお陰で最高の景色を見ることができた。

ぜひあなたも身近なあの人に真の応援をしてほしい。